聖霊降臨後第６主日（特定９）　　わたしの軛は負いやすい　　２０２３．７．９．

教会の看板にはよく、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたし（イエス・キリスト）のもとに来なさい。休ませてあげよう。」という聖書の言葉が、書かれています。

その言葉は、ちょうど、今日の福音書になっている、マタイによる福音書第１１章２８節の聖句です。聖書を見ると「わたしのもとに来なさい」という見出しがあって、教会に招くのにふさわしい言葉ということで、多くの教会が採用しているのでしょう。

そして、聖書はそれに続いて、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」と書かれています。
でも、どうして、イエス様のところへ来たら、休むことができて、安らぎが得られるのでしょう？

その理由は、これらの言葉に続く、今日の最後の言葉。「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」というふうに理由が書かれています。これは、大工だったイエス様の仕事ぶりが想像されるような、生活から出た言葉のように感じられます。

イエス様のお父さんであったヨセフが大工であったことはよく知られています。そして、イエス様も家業の大工の仕事を３０歳まで続けた、というふうにわたしたちは信じています。

ただ、どうも、イエス様の大工という職業については、二種類の説があるようです。一つは、わたしたちがよくイメージする、家を作る人のことです。しかし、日本のように木と紙で作る家とは違い、パレスチナあたりは、石で家を建てていたので、イエス様も、石を加工して部屋を増やしていく、石工だったのではないか、という説があります。ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です。」と言った信仰告白に対して「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上に教会を建てる。」と言われた時、石工として、岩というあだ名をつけたペトロに、そのしっかりした岩の性格を感じ取られたからではないか、という考えが出てきます。
また、もうひとつの大工としての仕事ですが、イエス様も、そのお父さんのヨセフも、家を作るのが仕事ではなく、木を加工して、家のテーブルや椅子、そして、農業で土を耕す時や、車を引かせるために、二頭の牛やロバの首にかける、木でできた軛、などを作る仕事をしていたのではないか、という説です。
ある聖書注解書を見ると、イエス様はガリラヤで一番の軛つくりの名人だった、と書かれています。下手な人が作った軛は、動物の体がすりむけたりするので、動物の体にぴったり合うように作ることが大切だった、ということで、イエス様が言われる「わたしの軛は負いやすい」の「負いやすい」とは、元々「体にぴったり合う」という意味のギリシャ語が使われているようです。

ですから、疲れている者、重荷を負う者たちが、軛作りの名人、大工のイエス様の手にかかると、今まで自分の体を痛めつけていた軛が、ぴったり体に合って、これから生きてゆく生活が、楽になる、ということを意味しているのです。重荷がなくなるのではないけれど、元気をだして、歩んでゆけるようになる、というのが、イエス様効果と言いますか、イエス様がおられることで、物事が、もっと楽に進むようになる、ということだろうと思います。

しかし、教会が２０００年前の、イエス様の時代なら、重荷を負った人もイエス様に直接会えたので、問題は解決したのでしょうが、現在、イエス様は昇天されて目に見えません。表の看板を見て、教会に入って来る人がいても、私たちはどうやって、イエス様のような働き、具体的に、人々を休ませ、軛を軽くしてあげられるのでしょうか。

私は、宗像に居る時、頼まれて、毎月ユダヤ教の勉強会を宗像でやっていましたが、最初の頃にテキストとして選んだ本の著者は、ユダヤ教のラビでした。この人は、神様は一人だということは認めていますが、神様が全能者である、ということを認めていないんですね。彼が有名になった本は、「なぜ私だけが苦しむのか」という文庫本です。紹介したこともあるので、皆さんご存知でしょう。その人の結論を、簡単な言葉で言うと、「神様にだってできないことがある。」ということです。

この人は、クシュナーという、アメリカに住むユダヤ教のラビです。彼には最初に男の子が生まれ、次に女の子が生まれたのですが、女の子が生まれた頃、最初の男の子は３歳でしたが、その男の子が、「早老症」（プロゲリア）という、病気であることがわかったのです。身長はせいぜい１メートルくらいで、頭や体には毛も生えず、子どものうちから小さな老人のような容貌になり、１０代前半で亡くなってしまう、という、大変な病気だったのです。

みなさんは、このような不幸が襲った人に、どのように言葉をかけることができるでしょうか。

このユダヤ教のラビ、クシュナー先生は、有名になった本「なぜわたしだけが苦しむのか」の序文に、こんなことを書いておられます。

『悲しみにくれている人びとへの援助について講演をするとき、私は次のようなことを人びとに話しています。「ものごとには時というものがあって、手のほどこしようのない状況が確かにあるのです。あなたがどれほど努力してみても修正したり解決できないことがあるのです。それでも、そんな時にも出来ることがあるのです。悲しみに打ちひしがれている人のそばに、ただただ黙っていてあげ、その人が泣いていれば泣く手助けをしてあげるのです。そうすれば、その人が置き去りにされ一人ぼっちで淋しく泣くということはなくなるのです。」』

悲しみにくれている人を、孤独にさせない、ということでしょう。慰めるつもりでかけた言葉が、尚一層相手を傷つけることもあるので、悲しんでいる人に、「あなたはひとりじゃないんだよ。」と一緒にいてあげることが、一見無駄のように見えて、実際は一番大切なことなんだ、と、このクシュナー先生は、自分自身の体験から感じておられるのだろうと思います。

イエス様は、「わたしの軛は負いやすい」とおっしゃいました。軛というのは、二頭の動物が一緒に作業するために作られたものです。軛作りの名人であるイエス様が、わたしたちの体にぴったりの素晴らしい軛を作ってくださる、という意味があるわけですが、そのほかに、私だけが、ひとりで軛を背負い、重荷を持っているのではなく、イエス様が共に背負って下さっている、ということが含まれているように私には思えるのです。

私たちが、日常の生活をする中で、「なぜ私だけが苦しむのか」などと、孤独を感じることがいろんな時に思わされるでしょうが、「神様がいつも共にいてくださる」「イエス様が、私たちの重荷を共に担ってくださっている。」そのことを信じられたなら、私たちは、少しずつ、立ち直れて、歩めるのではないでしょうか。

そのメッセージが、いろんな教会で、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」という聖句を看板に掲げている理由のように私には思えるのです。

孤独を感じる時、ともに重荷を担われるイエス様に信頼をおいて、歩みたい。そして、疲れて教会を訪ねて来る人には、「わたしがあなたの友だちになりますよ。」と言うことが大切なのだ、と思います。

教会は、世の中で働いている人たちに関わりを持って、日曜日だけでなく、気楽に教会に来てもらえるように工夫しなければなりません。私は月２回宮崎でやっている映画会が、昨年の夏に私自身が感染したことで、クリスマスの季節頃まで休んでいました。しかし、今年は、映画会を再開したことと同時に、３月、４月とお葬式がありました。

３月の場合は、教会の信徒の人ではなく、昨年の水曜日に歌の練習に集まっている人のひとりが、年末から体調を崩して、家族の希望で教会でお葬式をすることになりました。

私は特に亡くなった人のことは覚えていなかったのですが、お葬式の時の長女の方の挨拶で「母は合唱の練習に教会に行って、帰りには牧師さんが作った糠漬けを持って帰り、喜んで食べていた」という挨拶に驚きました。

６月の教区報に、お葬式での私の話を例に挙げました。
『限りある人生をどのように生きるか、問いかける。そしてエジプトの伝説を紹介する。エジプトでは、死者は天国の門の前で神様から二つの質問を受ける。①自分の人生に、喜びを見出せたか？②他人の人生に、喜びを与えられたか？　両方に「はい」と答えられることが人間の生きる意味なのだろう。これを紹介した作家は実現するための方法は、人間関係でも、対自然であっても、「赦す、誉める、励ます、助ける」だと言う。隣人愛の具体的な方法だろう。』

私たちの活動が、普段一人で暮らしている人びとを、元気にさせるものなら、きっとイエス様の教えに近いものになろうと思うのです。私たちの普段の活動が、人びとの重荷を楽にして、喜ばせるものになるように、心がけたいと思います。